相可出張遺跡発掘調査報告

—— 多気郡多気町相可字出張 ——

1 9 9 6 • 3

三重県埋蔵文化財センター

埋蔵文化財は、それぞれの地域における大切な過去の遺産であり現在に生きる我々が、後世に残していかなければならないものです。しかし、我々の生活が便利で豊かなものになっていく過程で、それらの多くの埋蔵文化財はその犠牲となってきたのも否定できない事実です。今ある快適な暮らしがそれらの犠牲の上に成り立っていることを、常に頭の片隅にでも置いておくことが必要でしょう。

今回、ここにご報告致しますのは、県立相可高校武道場建築工事に伴って消失する相可出張遺跡の発掘調査成果であります。調査の結果、奈良時代〜鎌倉時代に至るまでの様々な遺構や遺物が確認されました。当遺跡の所在しております多気町相可は、条里制の地割を今も残している土地でもあります。今回の調査でも奈良時代〜鎌倉時代の大変規模の大きな溝が検出されており、条里制との関連で注目されます。今回の調査で得られたこれらの資料が、郷土の歴史を解明していく上で広く活用されることを願ってやみません。

調査にあたっては、県教育委員会総務課、県立相可高等学校、多気町教育委員会、株式会社伊藤建設及び地元の方々には多大なご理解とご協力を賜りました。文末ながら、深く感謝の意を表明致します。

平成8年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長川村政敬

例 言

- 1. 本書は、三重県多気郡多気町相可字出張に所在する、相可出張(おうかでばり)遺跡の発掘調査報告書である。
- 2. 調査は、相可高等学校武道場建築工事に伴い、緊急発掘調査を実施したものである。
- 3. 調査は次の体制で行った。

調査主体 三重県教育委員会

調査担当 三重県埋蔵文化財センター

係長 杉谷 政樹

技師 日栄 智子

- 4. 調査にあたっては、三重県教育委員会総務課、三重県立相可高等学校、多気町教育委員会、(株) 伊藤建設及び地元の方々からの多大な御協力を頂いた。
- 5. 発掘調査後の出土遺物の整理及び当報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター 調査第一課及び管理指導課が行い、以下の方々の補佐を得た。執筆及び全体の編集、出 土遺物の写真撮影は、日栄智子が行った。

足立純子、有川芳子、石橋秀美、井村浩子、柿原清子、川口 愛、井田美奈子、楠純子、倉田由起子、小林佳代子、須賀幸枝、杉原泰子、武村千春、田中美樹、豊田幸子、富楽幸子、中川章世、中山豊子、西田衣里、西村秋子、浜崎佳代、早川陽子、堀内博子、松本晴美、松月浩子、森島公子、柳田敬子(50音順、敬称略)

- 6. 挿図の方位は、全て真北で示している。なお、磁針方位は西偏6°20′(平成3年)である。
- 7. 本書で用いた遺構表示略記号は下記による。

SB:掘立柱建物 SK:土坑 SD:溝 SA:石垣 SZ:性格不明遺構

- 8. 出土遺物や資料は、全て三重県埋蔵文化財センターで保管している。
- 9. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。 各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

Ι.	前	言	1
II.	位置	置と環境	1
III.	層位	立と遺構	
N.	遺		7
٧.	結	語	10
		44 50 1	\h_*
		挿 図 目	次
第 1		遺跡位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
第2		遺跡地形図	
第3	3 図	調査区位置図	
第4	図	調査区平面図・土層断面図	
第5	図	S B 10実測図	
第 6	図	S Z 9 実測図	
第7	' 図	SK2実測図	
第 8	3 図	山茶椀墨書実測図	
第9	図	出土遺物実測図(1)	
第1	図	出土遺物実測図(2)	9
		表 目	次
			· · ·
经 1	表	出土遺物観察表(1)	11
第 2		出土遺物観察表(2)	
分 4	4 30	山上退彻既宗衣(2)	12
		図 版 目	次
			>
図版	瓦 1	調査区遠景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	13
,		S D 1	
図別	反 2	SD1遺物出土状況	
		S K 2 遺物出土状況	
図版	ਓ 3	S Z 9 ·····	
		S B 10·····	
図版	⊽ 4	出土遺物・・・・・・・	
,			

I. 前 言

1. 調査に至る経過

三重県教育委員会文化芸術課及び埋蔵文化財セン ターでは、国及び県にかかる各種公共事業に関して、 各開発部局の事業を照会し、事業予定地内の文化財 の確認と、その保護に努めている。こうしたなかで、 三重県教育委員会事務局総務課から、相可高等学校 武道場建築工事計画の回答を受けた三重県埋蔵文化 財センターは、平成7年度に事業予定地内で現地調 査を実施した。武道場は、同校の旧寄宿舎及び旧体 育館を取り壊してその跡地に建設するものである。 そして、同年6月に事業予定地及び隣接地で試掘調 査を行ったところ、土坑や溝などが検出され、鎌倉 時代の土師器片や山茶椀などが出土したため、少な くとも武道場の建築予定地は鎌倉時代の遺跡範囲に 含まれることが判明した。校地内はすでに舗装され、 周辺も民家が立て込んでいるために必ずしも明確で はないが、遺跡範囲は地形的に見て櫛田川の段丘上 に広がるものと想定される。

遺跡の取り扱いについては、その保護に努めるよう県教育委員会総務課・相可高等学校と協議を重ねてきた。しかし、武道場建設は、高等学校教育の関係上必要であるため、建築予定地345㎡についてやむなく事前の調査を実施することになった。

調査は、県教育委員会総務課からの執行委任を受けて実施した。

2. 調査の経過

今回の調査は、予定地内に存在する旧体育館解体 工事と併行して平成7年9月18日から開始し、同 9月28日で終了した。最終的な調査面積は380㎡ であった。

小地区の設定にあたっては、4m×4mを基準として北から南にアルファベット、西から東に数字の番号を与え、地区名は北西隅の杭を基準とした。

なお、溝SD1については深さ3mに達し、調査 時に来襲した台風による崩壊の危険性があったため、 完掘はできなかった。

調査日誌 (抄)

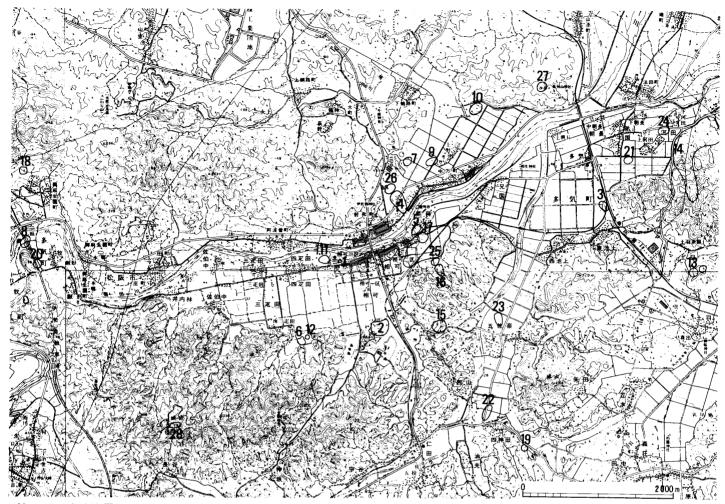
月 日

- 9.13 調査区表土を重機により除去。
- 9.14 表土除去完了。しかし旧体育館解体工事中 により西側を少し残す。
- 9.18 遺構検出開始。調査区西側にかなり深そうな落ち込みを確認。SD1とし、サプトレンチをいれる。遺構掘削開始。SK2から山茶椀、常滑甕等出土。
- 9.19 西側の表土除去。SD1は人力では掘削不可能と判断。やむなく小型重機による掘削を開始。SK2写真、遺物出土状況実測。 石組み状遺構(SZ9)検出。
- 9.20 調査区東側に掘立柱建物 (SB10) 検出。 調査区外のピット確認のため調査区南東部 を拡張。SK2 遺物取り上げ。
- 9.21 SD1掘削終了。SB10写真。調査区全体 の遺構掘削終了。清掃後、写真。SZ9平 面実測。
- 9. 22 SD1平板実測。北側で底確認のため1m幅を重機で掘削。SD1埋め戻し。校舎屋上より調査区全景の写真撮影。遺構平面実測の基準点設定。
- 9.26 SZ9立面実測。
- 9.27 SZ9立面、遺構平面実測終了。
- 9. 28 遺構レベル計測。調査区東壁、南壁及びS D1土層断面実測。調査区北側に検出され た石垣の出土状況実測。平板実測の補足。 現場での調査はすべて終了。

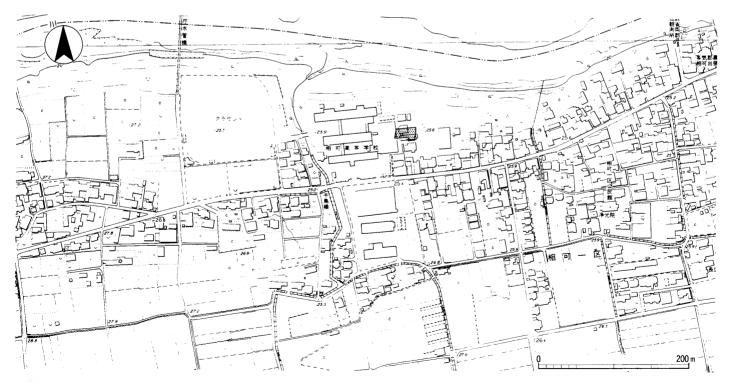
II. 位置と環境

相可出張遺跡(1)は櫛田川右岸の低位段丘面に 立地し、多気郡多気町相可字出張に位置する。現在

は三重県立相可高等学校の敷地となっている。当遺 跡が立地する段丘は、背後の丘陵まで約1kmの幅を



第1図 遺跡位置図(1:50,000、国土地理院 大河内・横野・松阪・国東山 1:25,000から)



第2図 遺跡地形図(1:5,000)

持つ。この丘陵から流れ出る小川は段丘上の水田を 潤して櫛田川へ流れ込むが、段丘端部近くなると段 丘面を深く浸食して小さな谷を形成している。

櫛田川は、高見山系にその源を発して東流し、伊 勢湾にそそぐ。その中流域では、両岸の丘陵地との 間に河岸段丘が発達し、下流域では肥沃な沖積平野 を形成している。この櫛田川流域には数多くの遺跡 が知られている。

縄文時代には、相可周辺では草創期・早期の遺跡 が集中しており、牟山遺跡(2)、坂倉遺跡(3)。 鴻ノ木遺跡(4)等がある。また、後期の遺跡とし て新徳寺遺跡(5) がある。特に牟山遺跡からは早 期の押型文十器等のほか、多量の草創期にまで溯る 石器が出土しており、早くからこの地に人々が生活 を営んでいたことが窺える。また遺跡のすぐ西の高 皿遺跡(6)でも、今年度調査が行われており、草 創期の石器が多量に出土している。弥生時代になる と、前期には鐘突遺跡(7)。、中期には、竪穴住居 跡や方形周溝墓が検出された花ノ木遺跡(8)等が ある。さらに後期に入ると櫛田川下流域での分布が 顕著になり、上寺遺跡(9)、射原垣内遺跡(10)、 相可高校グラウンド遺跡(11)等が挙げられる。相 可高校グラウンド遺跡は今回報告する相可出張遺跡 (1) の西に広がる遺跡で、いわゆる「パレススタ イル | の土器が出土している。また四疋田には銅鐸 出土地(12)が伝えられているが、その詳細につい ては明らかではない。

古墳時代になると、櫛田川下流域左岸のいわゆる 玉城丘陵に多くの古墳が見られる。5世紀前半の権 現山1・2号墳(13)をはじめとして、造出付円墳 である高塚1号墳、大塚1号墳、神前山1号墳等が ある。そして後期になると、多くの古墳群が分布し 始め、代表的なものに10支群約100基から成る河田 古墳群(14)や天王山古墳群、神前山古墳群等が挙 げられる。また古墳以外の遺跡としては、7世紀前 半代の須恵器窯である明気窯跡群(15)がある。河田 古墳群(14)や大日山古墳群(16)、上ノ垣外遺跡 (17)等の周辺の遺跡からもこの窯で焼かれた製品が 出土しているとの報告もあり、当時の須恵器の生産、 流通を考える上でも大変興味深い。

飛鳥・奈良時代以降平安・鎌倉時代の遺跡として

は、櫛田川中流域に位置し、その創建が白鳳期にま で溯る松阪市の御麻牛蘭廃寺(18)や天平期の瓦が 採集されている四神田廃寺(19)等の寺院跡が挙げ られる。そして、これらの寺院跡と関連して注目さ れるのが、牧瓦窯群跡(20)である。これは7基の 登窯と1基の平窯から成り、8世紀初めから中頃に 操業されていたと考えられている。御麻生薗廃寺 (18) からは、この瓦窯で焼いたと思われる瓦が見 つかっている。これ以外の遺跡としては、土馬、斎 串等の祭祀用遺物や墨書土器が出土したカウジデン 遺跡(21)、条里溝に比定されている大溝が検出さ れたミゾコ遺跡(22)、五佐奈遺跡(23)、東裏遺 跡(24)、等がある。また近年、国道42号松阪・多 気バイパスの建設に伴って、予定地内の遺跡が数多 く発掘されている。多気町荒蒔の上ノ垣外遺跡(17)、 巣護遺跡(25)をはじめ、掘立柱建物・竪穴住居等 が検出された朱中遺跡(26)、鴻ノ木遺跡(4)、 東牛込遺跡、堀町遺跡、御堂山遺跡、山ノ花遺跡等

古代における多気町を物語る上でもう一つ触れておかねばならないのが、条里制についてであろう。相可周辺の地形を見てみると、条里制の地割を今もまだ残していることがよく分かる。多気町内における条里制は、条を北から南へ、里を西から東へと施行されたと見られており、櫛田川を境にして南へ十六から二十一条までのびている。方向はN9°Wである。三疋田、四疋田、相可の字名は、その内の十六条の里にあらわれる地名を現在もそのまま残すものである。今回の調査区は、この十六条の「五相可里」の北西端にあたっている。

また、多気郡は律令制施行下においても伊勢神宮 との関連から、多くの御厨・御園が設置されていた 地であった。平安時代には、京都の東寺領である川 合・大国荘が、多気、飯野両郡に散在していた。

この様な荘園も櫛田川の度重なる氾濫や武士の台頭とともに次第に衰え、時代は戦乱の世へと移行していくのである。

こうした中で、中世以降、北畠氏との関連で多気 郡やその周辺でも城館が築かれるようになる。特に 南北朝の動乱の時代、北畠氏の家臣が多気町でも活 躍していたと考えられ、その関係で城や砦も多い。 北畠氏が最初に根拠地を求めた玉丸城をはじめ、神山城(27)、伊勢神宮外宮祢宜である度会家行が篭もった近津長谷城(28)等がある。

室町時代以降、引き続き多気郡は伊勢国司である

北畠氏の支配を受けるが、織田信長の侵攻によって 北畠氏が滅亡すると、多気郡を含む南勢も信長の全 国統一の波に呑み込まれていくことになるのである。

III. 層位と遺構

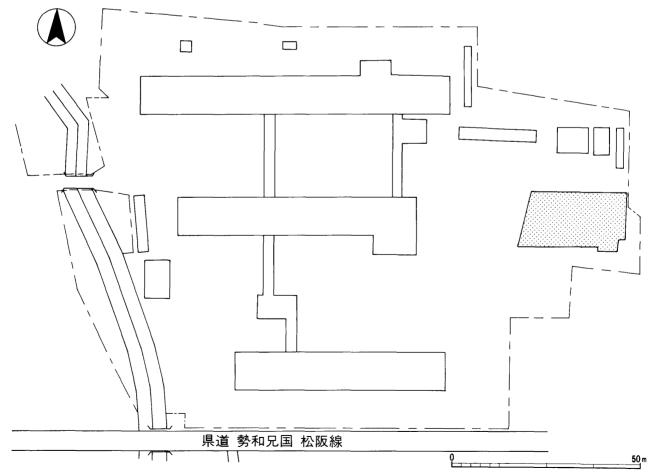
(1)層位

当遺跡の基本的な層位は、第1層:表土、第2層: 旧寄宿舎及び、旧体育館建設工事に伴う整地土、第 3層:茶褐色土(遺物包含層)、第4層:黄褐色砂 質土(地山)の順であり、遺構検出は第4層黄褐色 砂質土の上面で行った。ただし、北半部は旧寄宿舎 の基盤が深く、第5層黄褐色砂で遺構を検出した。 また、調査区のほぼ全体にわたり旧寄宿舎及び、旧 体育館の基礎によりかなり撹乱を受けており、包含 層はほとんど認められず、遺構面もかなり削平され ていた。

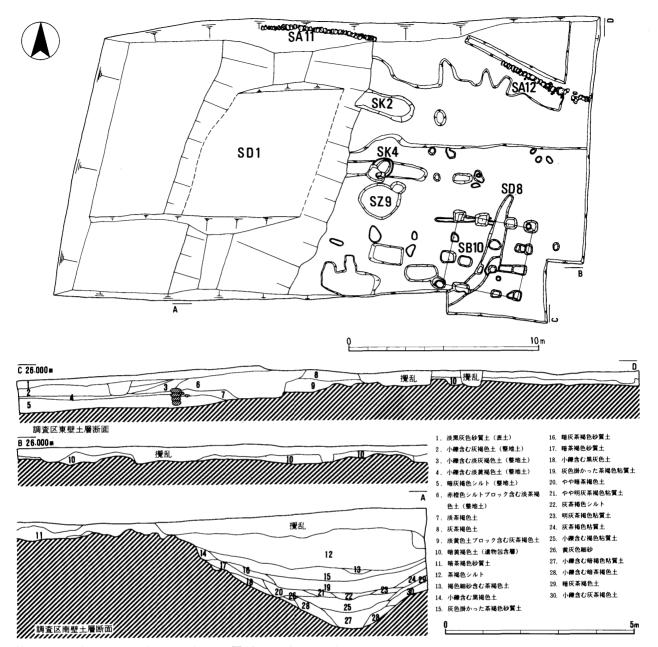
(2) 遺構

今回検出された主な遺構には、概ね奈良時代後期

〜鎌倉時代初頭の溝、土坑、掘立柱建物、石組み遺構等がある。以下、各遺構毎にその概略を述べる。 SD1 調査区を南北に走る非常に規模の大きいもので、幅は8~9mで深さは3mである。溝の底は北に向かって0.3~0.4m程傾斜している。流路の方向はN16° Eである。南北の両端では深さを確認するため底まで掘りきったが、調査区の壁が崩落する危険性があったので中央部分については未掘である。溝埋土の土層は大きく3層に分かれ、上層から茶褐色系土、灰褐色系シルト、円礫を含む褐色系粘質土の順である。遺物は上層から鎌倉時代初め頃の山茶椀、土師器の皿、鍋等が、中層からは、平安時代後期を中心とする灰釉陶器、土師器皿等が、下層から



第3図 調査区位置図(1:1,000)今回の調査はトーン部分



第4図 調査区平面図(1:200)・土層断面図(1:100)

は奈良時代後半の土師器の高杯、須恵器の甕等が出 土している。

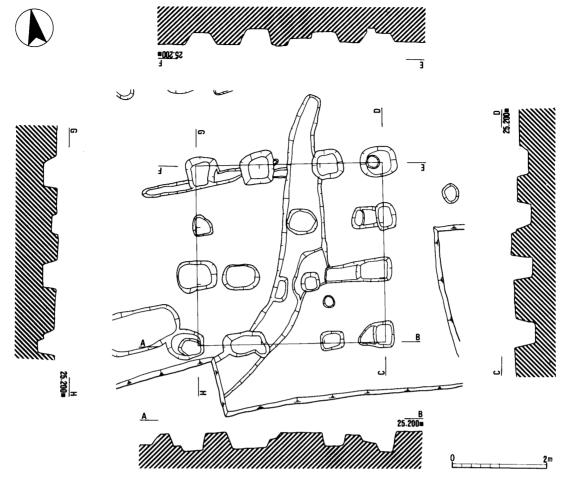
SD8 調査区の東端部で検出した南北溝で、南端は西へ屈曲し調査区外に至る。幅0.9m前後で、深さは0.1m程のごく浅いものである。遺物は土師器片が少量出土したのみで、時期は不明である。

SB10 調査区の東南部で検出した3間(4 m)×3間(4 m)の建物である。SB10が検出された場所は撹乱層がかなり厚かったため、東柱が検出出来なかった可能性もあるので、総柱か側柱かは判断しかねる。建物方向はN12°Eである。柱間は約1.5 mであるが、南側の柱列は、中央部の柱間がやや広

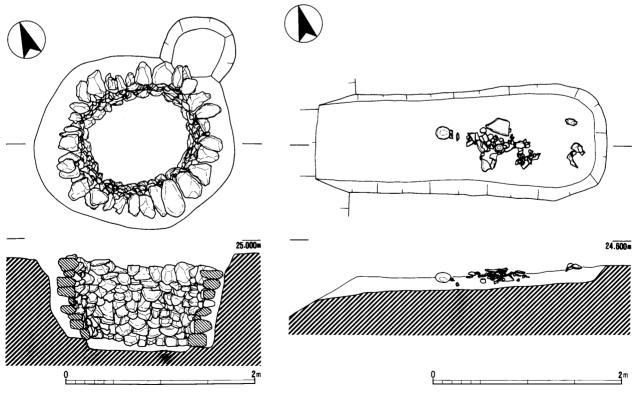
い。柱穴からは土師器片が少量出土しているのみであり、時期は概ね奈良時代の中でとらえられよう。 建物の平面形は方形であり、束柱は明確ではないが、 倉庫としての使用が想定される。

SK2 調査区の中央やや北寄りで検出した13世紀 初頭頃の長方形の土坑で、長径3m、短径1.3m、 深さは0.25mである。西端をSD1と接しているが、 切り合いは明確ではない。山茶椀、山皿、陶器の片 口鉢、土師器の皿・鍋等が大量に一括投棄された状態で出土した。又、瓦器椀が1点件出している。

SK4 調査区のほぼ中央、SZ9の北で検出した 13世紀初頭頃の楕円形の土坑で、長径1.6m、短径



第5図 SB10実測図(1:80)



第6図 SZ9実測図(1:40)

第7図 SK2実測図(1:40)

1.1mである。遺物は、山茶椀、山皿、土師器皿・ 鍋等の他、埋土上層から鉄製の小刀が出土した。

SK5 SB10の西から検出された長径1.7m、短径0.9mの長方形の土坑である。遺物は少量だったが、13世紀中頃の山茶椀、土師器皿等が出土している。

S 2 9 調査区のほぼ中央で検出した直径1.6m前後、深さ0.9mで、ほぼ円形に8段ほど石が積まれている遺構である。平面形からは井戸と思われるが、非常に浅く、底が透水性の高い砂となっているため

に断定はしかねる。遺物は山茶椀、土師器の皿、陶器の広口壷、片口鉢等が出土しているが、13世紀から14世紀くらいの時期幅がある。

SA10・11 SD1の北側及び、調査区北東端で検出した。これらの石垣は旧寄宿舎が建設される以前のものではあるが、明確な時期は不明である。旧寄宿舎基礎の撹乱のため、調査区内では1段分しか残っていなかったが、調査区東壁断面では4段分を確認した。

Ⅳ. 遺

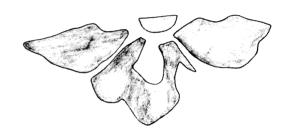
遺物は奈良時代後期から鎌倉時代中葉の土師器、 山茶椀等を中心に整理箱に約14箱出土している。以 下、遺構毎にその概略を述べる。各遺物に関しては、 観察表(第1・2表)を参照されたい。

なお、各遺物の型式・編年観に関しては、山茶椀は藤澤良祐氏、常滑窯製品は赤羽一郎氏、中野晴久 『美、灰釉陶器は斎藤孝正氏、小森俊寛氏、土師器鍋は伊藤裕偉氏、瓦器は山田猛氏の見解にそれぞれ拠っている。

SD1出土の遺物(1~18)

1は最下層から出土した土師器高杯の脚部である。 面取りされた一面を持つ。奈良時代後半代のもので あろう。2は中層から出土した灰釉陶器の長頚瓶で 口縁部は欠損しているが、概ね東山72号窯併行の時 期のものと考えられる。3は土師器の皿で、口縁部 のヨコナデが顕著に見られる。4~6は土師器の甕 である。6は口縁部を若干欠くが、ほぼ完形である。 溝の東肩付近から口縁部を下にした状態で出土した。 口縁端部を折り返さずにそのまま丸くおさめている もので、多気郡明和町に所在する外山遺跡B区の井 戸と推定されているSK3から類例が出土している。 3~6はいずれも平安時代後半代のものと考えられ る。7は灰釉陶器の椀の底部で、百代寺窯併行期の 灰釉陶器も終末頃のものであろう。8~15は山茶椀、 6・7は山皿、18は陶器の鉢である。いずれも上層 から出土したもので、藤澤編年第5・6型式あたり に比定できるが、8・10はしっかりとした高台を貼 り付けており、底部付近の体部はかなり丸味を持っ

物

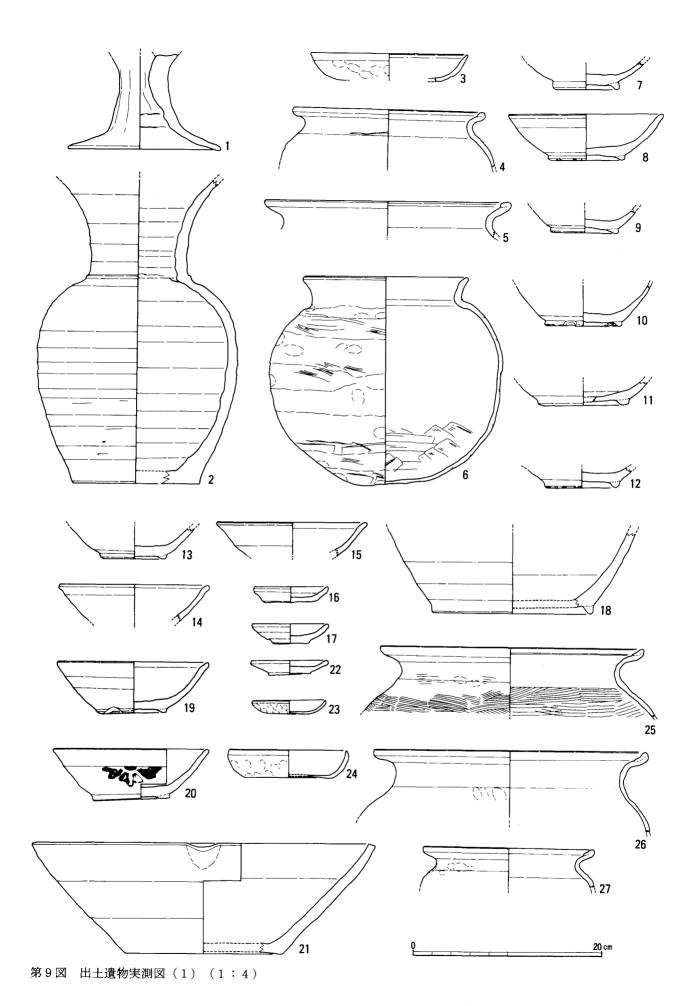


第8図 山茶椀墨書実測図(1:1)

ているので、第4型式まで上がるようである。また、 16の山皿は、口縁部の面取りが顕著で底部内面から 口縁部に向かってかなり直線的に立ち上がっていく ので、第7型式まで下がる可能性もある。

SK2出土の遺物(19~33)

19・20は山茶椀で、いずれも渥美産と考えられ藤 澤編年第5型式の新しいものと考えられる。20は花 弁状の文様が体部外面の口縁部上端から約2 cm下の ロクロ水引き痕から下部に施されている。(第8図 参照) 手書きかもしくは、墨を用いてスタンプで押 印したようにも見受けられるが、定かではない。21 は陶器の片口鉢で、産地は常滑である。中野編年の 概ね6 a 型式に比定できる。22は山皿、23・24は土 師器の皿である。いずれも底部から口縁部にかけて は内弯気味に立ち上がり、口縁端部はヨコナデされ ている。24は底部に比べて体部の器壁はかなり厚い。 25~32は土師器の鍋である。25~31は折り返された 端部に強いヨコナデが施される口縁部を持つもので、 伊藤編年の第1段階に分類される。32は口縁端部の 折り返し部分が上方に立ち上がって受け口状になる もので、形式的には伊藤編年の第2段階に分類され



-- 8 **--**

るが、時期的には、前者と併行するものと考えられる。33は当遺跡から1点のみ出土した瓦器椀である。体部外面には指圧痕がそのまま残り、ヘラミガキは殆ど見られない。内面は体部に横方向、底部にヘラミガキによる簡略化された螺旋文が施されている。口縁部はヨコナデされやや外反している。山田編年の概ねIII段階第1型式に相当しよう。時期的に山茶椀、土師器等と矛盾しないと思われる。

SK3出土の遺物(34~36)

34は小刀と考えられる鉄製品である。遺構埋土直上から出土した。部分的にサヤと思われる木片が付着している。35・36はいずれも藤澤編年第6型式あ

たりに比定できる山茶椀及び山皿である。

S Z 9 出土の遺物 (37)

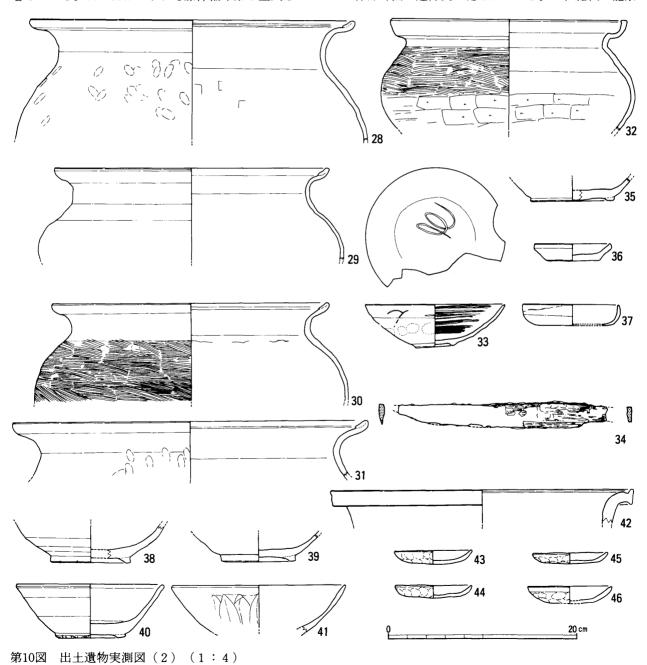
土師器の皿で、口縁部はほぼ完存する。器壁は薄く、口縁部を含め体部内外面に広い範囲でヨコナデを施している。時期は14世紀後半以降と考えられる。

ピット出土の遺物 (38)

山茶椀の底部で、底部付近は肥厚しつつ丸味を帯び、しっかりした高台を貼り付けている。藤澤編年第4型式あたりに比定できようか。

包含層出土の遺物(39~46)

39・40は山茶椀である。41は青磁椀の破片である。 体部外面に連弁文が施されている。13世紀代の龍泉



-- 9 **--**

窯系の製品と考えられる。42は常滑産の甕で断面N字状の口縁部を持つ。中野編年5・6a型式くらいに相当しよう。43~46は土師器の皿である。口縁端

部のヨコナデの範囲が狭くて弱いもの(43~45)と、 広くて強いもの(46)がある。

Ⅴ. 結

(1) 大溝SD1について

相可出張遺跡は、その所在地の相可という字名から条里制との関連が予想できる。II章でも若干触れたが、今回の調査区は十六条五相可里にあたると復元されている。

このことを踏まえると、遺構について今回の調査でまず注目されるのは、調査区を南北に走る大溝SD1であろう。当遺跡周辺の河岸段丘から櫛田川に流れ込む小河川は、段丘端部に至ると急激に落ち込む谷状の地形を呈し、幅も広くなる。SD1の規模が大きいのも、同様に端部近くで段丘を大きく浸食した結果であろう。

SD1の時期については、少なくとも奈良時代後 半には存在しており、鎌倉時代初頭には埋まってい たものと考えられる。また、本遺構の性格について は先述の様に条里地割との関連を考慮する必要があ る。多気郡条里の方向は、N9°WでありN16°E のSD1とは方向がずれる。このため条里溝そのも のとは言い難い。しかし、現在の地形を見ると、相 可高校の両側では、条里地割の方向にのって南側か ら流れる2本の小川が直角に折れ曲がって合流し、 櫛田川に注ぐ不自然な流路となっている。その内東 側の小川が屈曲することなくそのまま蛇行して櫛田 川に注いでいたと仮定すると、SD1付近を通過す ることになり、SD1は条里溝として利用されてい た小川の延長上にあたる部分であった可能性もある。 多気郡の条里地割は、実際の地形に則して設定され た傾向が強いとの指摘もあり、周辺の地形を利用し た古代の土地区画の方法を検討するのに良い事例と なりそうである。

一方、SD1の東側で検出した掘立柱建物SB10は、方向もSD1と合っており、倉庫と考えられる建物であるところから、南・東側に同時期の建物群が存在する可能性もある。その際、SD1はこれらを区画する役割を持つものであったということもで

좚

きよう。

(2) 出土遺物について

遺物については、山茶椀のことに若干触れておき たい。今回出土した山茶椀の内で、時期を判断でき る破片に限り、産地毎に型式を分け、その点数をカ ウントした。型式に関しては、藤澤良祐氏の見解に 従っている。その結果、全体的には時期は第5型式 か第6型式に含まれるものがほとんどで、産地は尾 張型より渥美・湖西型の方が多いという傾向が見受 けられた。カウント可能な破片47点の内、産地別に みると、渥美・湖西型28点、(59.6%)に対して尾 張型19点(40.4%)であった。次に型式別にその産 地の出土状況をみていきたい。第4型式では、渥美・ 湖西型4点(66.7%)に対し尾張型2点(33.3%)、 第5型式では、渥美・湖西型12点(54.5%)に対し て尾張型10点(45.4%)、第6型式では、渥美・湖 西型12点(66.7%)に対して尾張型6点(33.3%) という結果であった。第7型式のものに関しては、 尾張型の山皿が1点出土したのみであった。

当遺跡の所在する多気町を含む南勢地方では、第4型式くらいから渥美・湖西型が尾張型より優位に立つ傾向が指摘されている。全体的には、当遺跡もこの傾向が窺える。しかし第6型式からは渥美窯の生産の減少に伴って、消費地でも尾張型に対する渥美・湖西型の比率が低下する傾向が指摘されているが、当遺跡では第6型式でも渥美・湖西型の優位がみられる。ただし、南伊勢の遺跡では渥美・湖西型が優位に立つという傾向は第6型式においても依然見受けられるので、この地方の全体的傾向とは矛盾しないようである。

わずか47点という少ない資料からの比率であるが 南伊勢における山茶椀の流通を考える上での資料蓄 積の一助となろう。

また、SK2からは瓦器の椀が一点出土している。 多気町においては、現在までのところ、巣護遺跡と 上ノ垣外遺跡から12世紀~13世紀の瓦器の破片が数点出土しているのみである。山茶椀が圧倒的優位を占める南勢において、瓦器が出土しているということは大変興味深い。

[註]

- ① 奥 義次「第2編 原始」『多気町史』通史 多気町史編纂委員会 1993
- ② 三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター『一般国道42号 松阪・多気バイパス 埋蔵文化財発掘調査概報 I ~ V』 1991 ~1994
- ③ 前掲①
- 4) 前掲(1)
- ⑤ 松葉和也・山田猛『高皿遺跡発掘調査概報』三重県埋蔵文化財センター 1996
- ⑥ 前掲①
- ① 田村陽一「花ノ木(山崎)遺跡」『近畿自動車道(久居〜勢和) 埋蔵文化財発掘調査報告一第一分冊1-』三重県教育委員会 1989
- ⑧ 前掲①
- 9 前掲①
- (10) 前掲(1)
- ① 吉水康夫他『河田古墳群発掘調査報告 I 』多気町教育委員会 1974
- ② 三重県埋蔵文化財センター「明気窯跡群発掘調査現地説明会資料」『国道42号バイパス松阪・多気発掘調査だよりNo.6』 1994
- ② 奥 義次「第3編古代・中世 第一章古代」『多気町史』通史 多気町史編纂委員会 1993
- ④ 鈴木敏男『三重縣古瓦圖録』樂山文庫 1933
- ⑤ 河北秀実「多気群多気町牧・鍬形 牧瓦窯跡群」『近畿自動車道(久居~勢和)埋蔵文化財発掘調査報告-第一分冊2-』三重県教育委員会 1989
- 16 前掲①
- ① 前掲②

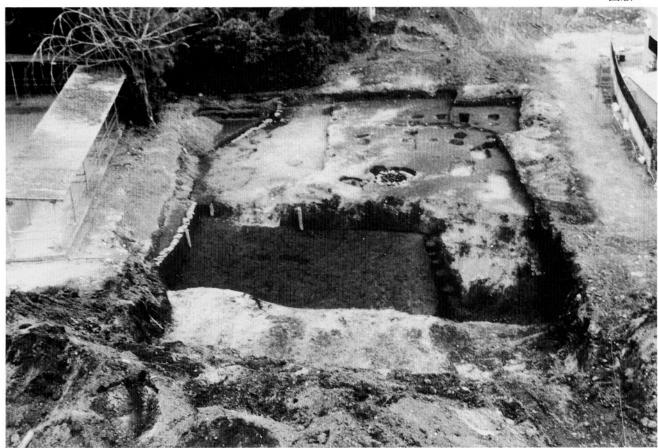
- (3) 奥 義次「第3編古代・中世 第二章 近長谷寺資財帳」『多 気町史』通史 多気町史編纂委員会 1993
- (9) 奥 義次「第3編古代・中世 第三章 東寺領川合・大国荘」 『多気町史』通史 多気町史編纂委員会 1993
- 20 前掲(18)
- ② 藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要 第3号』三 重県埋蔵文化財センター 1994
- ② 赤羽一郎・中野晴久「生産地における編年について」『全国シンポジウム 中世常滑焼をおって 資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所 1993
- ② 斉藤孝正「施釉陶器年代論」『論争・学説 日本の考古学6』 雄山閣 1991 斉藤孝正「東海地方の施釉陶器生産」『古代の土器研究-律令
- 的土器様式の西東3 施釉陶器』古代の土器研究会 1994 ② 小森俊寛「平安京出土の灰釉陶器」『古代の土器研究ー律令的 土器様式の西東3 施釉陶器』古代の土器研究会 1994 伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history』Vol. 1 三重歴史文化研究会 1990
- ② 伊藤裕偉「伊勢系土師器の展開と中世土器工人」『研究紀要第 1号』三重県埋蔵文化財センター 1992
- ④ 山田猛「伊賀の瓦器に関する若干の考察」『中近世土器の基礎研究II』日本中世土器研究会 1986
- ② 小林秀「2 外山遺跡」『平成元年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告一第1分冊ー』三重県教育委員会 三重県埋蔵文化財センター 1990
- 28 大川勝宏氏のご教示による。
- ② 小林秀『巣護遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1996
- 30 前掲30
- ③ 前川嘉宏「三重県における山茶椀の出土状況」『研究紀要 第 3号』三重県埋蔵文化財センター 1994
- ③ 前掲③
- 3 田村陽一「巣護遺跡」『一般国道42号松阪・多気バイパス建設 地内発掘調査報告 I ①明気窯跡群②大日山古墳群③甘糟遺跡 ④巣護遺跡』三重県埋蔵文化財センター 1996 田村陽一・西村修久『一般国道42号松阪・多気バイパス建設地 内発掘調査報告 II 上ノ垣外遺跡』三重県埋蔵文化財センター 1996

No.	登録No.	器 種	出土位置	法量 [cm]	残存度	形態・技法・調整等の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	015-03	土師器高杯	SD1	底:16.0	1/8以下	内:ナデ、粘土接合痕 外:ナデ	やや粗 細砂粒含	並	橙色	最下層出土
2	014-01	灰釉陶器 長頚瓶	SD1	底:13.2	3/8	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、ロクロ ケズリ	やや密 細 砂粒含	並	灰白色	体部外面に自 然釉
3	005-04	上師器 皿	SD1	□:16.6	1/8	内:ナデ、口縁部ヨコナデ 外:オサエ、 ナデ、口縁部ヨコナデ	密 細砂粒 少し含	良	灰白色	
4	005-01	土師器 甕	SD1	□:22.3	1/8以下	内:ナデ、口縁部ヨコナデ 外:ナデ	粗 細砂粒 多く含	良	浅黄橙色	
5	005-02	土師器 蹇	SD1	□:26.0	1/8以下	内:ナデ、口縁部ヨコナデ 外:ナデ	やや密 細 砂粒多く含	良	浅黄橙色	
6	002-01	土師器 甕	SD1	口:17.0 胴:24.5(最 大径) 器高:22.2	ほぼ完存	内:ナデ、ケズリ、口縁部ヨコナデ 外: 口縁部ヨコナデ、ナデ	やや密 微 細砂粒含	良	浅黄橙色	体部外面に粘 土接合痕
7	003-01	灰釉陶器 椀	SD1	底:7.2	ほぼ完存	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、底部糸 切り、高台貼付け後ナデ	やや密 細砂粒少し含	良	灰白色	
8	003-03	山茶椀	SD1	口:16.5 底:8.2 器高:4.9	口縁部1/3 底部2/3	内:ロクロナデ、自然釉付着 外:ロクロ ナデ、底部糸切り、高台貼付け後ナデ 底 部にモミガラ痕	やや密 細 砂粒多く含	良	灰白色	尾張型
9	004-02	山茶椀	SD1	底:7.2	1/2	内:ロクロナデ、自然釉付着 外:ロクロ ナデ、底部糸切り、高台貼付け後ナデ 底 部にモミガラ痕	やや密 細砂粒多く含	良	オリーブ 灰色	尾張型
10	003-02	山茶椀	SD1	底:8.2	1/2	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、自然釉 付着、底部糸切り、高台貼付け後ナデ 底 部にモミガラ痕、トチン痕あり	密 細砂粒 多く含	良	灰白色	渥美・湖西型
11	003-05	山茶椀	S D 1	底:9.6	1/3	内:ロクロナデ 底部にオサエ 外:ロクロナデ、底部糸切り、高台貼付け後ナデ	やや密 砂 粒多く含	良	灰白色	尾張型(知多 窯産か)
12	003-04	山茶椀	SD1	底:7.6	7/8	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、自然釉 付着、底部糸切り、高台貼付け後ナデ 底 部にモミガラ痕	やや密 砂 粒多く含	良	灰白色	渥美・湖西型
13	004-03	山茶椀	SD1	底:7.2	2/3	内:ロクロナデ、自然釉付着 外:ロクロ ナデ、底部糸切り、高台貼付け後ナデ 底 部に砂痕	やや密 細 砂粒含	良	褐灰色	渥美・湖西型
14	004-04	山茶椀	S D 1	□:15.9	1/3	内:口縁部ヨコナデ、ロクロナデ、外:口 縁部ヨコナデ、ロクロナデ	やや密 細砂粒多く含	良	灰色	渥美・湖西型
15	004-06	山茶椀	S D 1	□:15.9	1/6	内:ロクロナデ、外:ロクロナデ	やや粗 細 砂粒多く含	良	灰色	渥美・湖西型

第1表 出土遺物観察表(1)

No.	登録No.	器 種	出土位置	法量 [cm]	残存度	形態・技法・調整等の特徴	胎土	焼成	色調	備考
16	003-06	ш ш	S D 1	口:7.9底:5.4 器高:1.8	口縁部5/6 底部完存	内:ロクロナデ、底部にユビナデ、外:ロ クロナデ、自然釉付着、底部糸切り	やや密 細砂粒多く含	良	灰白色	尾張型
17	003-07	ш ш	SD1	口:8.1底:3.8 器高:2.1	口縁部1/2 底部完存	内:ロクロナデ、外:ロクロナデ、底部糸 切り	やや密 細 砂粒含	良	灰白色	渥美・湖西型
18	004-01	陶器 鉢	SD1	底:17.0	1/8以下	内:ロクロナデ、外:ロクロナデ、ロクロ ケズリ、高台貼付け後ナデ	粗 砂粒多 く含	良	灰色	
19	007-02	山茶椀	S K 2	口:15.8 底:7.3 器高:5.7	完 存	内:ロクロナデ、外:ロクロナデ、底部糸 切り後ナデケシ、砂痕 高台貼付け後ナデ 口縁部にスス付着	やや密 細 砂粒含	良	灰白色	渥美・湖西型
20	007-01	山茶椀	S K 2	口:16.3 底:8.0 器高:5.5	完 存	内:ロクロナデ、外:ロクロナデ、底部糸 切り後ナデケシ、砂痕 高台貼付け後ナデ 体部に花弁文	やや密 細 砂粒含	良	灰白色	渥美・湖西型
21	006-01	陶 器 片口鉢	S K 2	口:36.0 底:16.6 器高:11.8	口縁部1/4 底部1/4	内:ナデ、口縁部ョコナデ 外:ナデ、口 縁部ョコナデ	やや密 砂 粒含	良	たぶい橙・ 赤褐色	常滑窯産
22	006-03	ш ш	S K 2	口:8.1底:4.4 器高:1.6	完 存	内:ロクロナデ、外:ロクロナデ、底部糸 切り	やや密 砂 粒含	良	灰白色	尾張型 (知多 窯産か)
23	006-05	上師器 皿	S K 2	口:7.8底:4.2 器高:1.5	口縁部3/4	内:ナデ、口縁部ヨコナデ 外:オサエ、 口縁部ヨコナデ	やや密 徴 砂粒含	良	にぶい橙 色	
24	007-04	土師器 皿	S K 2	口:12.2 底:9.0 器高:2.9	口縁部3/8	内:ナデ、口縁部ヨコナデ 外:オサエ、 口縁部ヨコナデ	粗 細砂粒	良	淡赤橙。 灰褐色	
25	012-03	土師器 鍋	S K 2	□:27.5	ほぼ完存	内:ヨコ方向のハケメ、口縁部ヨコナデ 外:ヨコ方向のハケメ、口縁部ヨコナデ	やや粗 微 細砂粒含	並	にぶい黄 橙色	外面にスス付 着
26	012-01	土師器 鍋	S K 2	□:28.4	3/8	内:ナデ、口縁部ヨコナデ 外 :オサエ、 ナデ、口縁部ヨコナデ	やや粗 徴 細砂粒含	並	灰褐色	外面にスス付 着
27	010-01	土師器 鍋	S K 2	□:18.0	1/2	内:ナデ、口縁部ヨコナデ 外 :オサエ、 ナデ、口縁部ヨコナデ	やや密 徴 砂粒少し含	並	にぶい黄 橙・灰黄 褐色	外面にスス多 く付着
28	013-01	土師器 鍋	S K 2	□:33.8	1/6	内:ナデ、口縁部ヨコナデ 外:オサエ後 ナデ、口縁部ヨコナデ	やや粗 微 細砂粒含	並	にぶい橙 色	外面にスス付 着
29	010-02	土師器 鍋	S K 2	□:29.0	3/4	内:ナデ、口縁部ヨコナデ 外 :オサエ後 ナデ、口縁部ヨコナデ	密 微砂粒 少し含	並	灰黄褐色	
30	013-02	土師器 鍋	S K 2	□:29.0	1/2	内:ナデ、口縁部ヨコナデ、粘土接合痕有 外:ヨコ方向のハケメ、口縁部ヨコナデ スス付着	やや粗 細 砂粒含	並	浅黄橙色	ハケメ 8本/cm
31	012-02	土師器 鍋	S K 2	□:37.2	1/5	内:ナデ、口縁部ヨコナデ、 外: オサエ、 ナデ、口縁部ヨコナデ	やや粗 細 砂粒含	並	灰白・黄 灰色	外面にスス付 着
32	011-01	土師器 鍋	S K 2	口:25.0 胴:27.0(最 大径)	口縁部1/2	内:ナデ、ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ 外:オサエ、ヨコ方向のハケメ、口縁部ヨ コナデ スス多く付着	やや粗 微 砂粒含	並	黒褐・浅 黄橙色	ハケメ 7本/cm
33	015-01	瓦器 椀	S K 2	口:14.8 底:4.2 器高:4.5	口縁部5/8 底部3/4	内:ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ 外:オ サエ、ナデ、口縁部ヨコナデ、高台貼付後 ヨコナデ	やや密 微 砂粒含	並	灰色	
34	001-01	鉄 器 小刀	S K 2	長:22.0 最大幅:2.8	-					木片付着
35	006-02	山茶椀	S K 4	底:8.8	1/2	内:ロクロナデ、外:ロクロナデ、底部糸 切り、高台貼付け後ナデ	密 細砂粒含	良	灰白色	渥美・湖西型
36	006-04	计正	S K 4	口:8.2 底:5.7 器高:1.8	口縁部1/2 底部5/8	内:ロクロナデ、外:ロクロナデ、底部糸 切り	やや粗 徴 細砂粒含	良	灰白色	尾張型
37	015-02	土師器 皿	S Z 9	口:10.0 器高:2.2	口縁部 ほぼ完存	内:ナデ、口縁部ヨコナデ 外:オサエ、 口縁部付近に粘土接合痕	やや粗 微 細砂粒含	並	浅黄橙色	
38	007-03	山茶椀	F4 Pit1	底:8.4	1/3	内:ロクロナデ、外:ロクロナデ、底部糸 切り、高台貼付け後ナデ、モミガラ痕	やや密 細 砂粒含	良	灰白色	渥美・湖西型
39	009-03	山茶椀	包含層	底:7.8	完 存	内:ロクロナデ、ナデ 体部に自然釉 外:ロクロナデ、底部糸切り後ナデケシ、 高台貼付け後ナデ	密 微砂粒	良	灰白色	渥美・湖西型
40	008-01	山茶椀	包含層	口:15.4 底:7.4 器高:5.7	口縁部1/8 底部完存	内:ロクロナデ、体部にスス付着 外:ロ クロナデ、底部糸切り後ナデケシ、高台貼 付け後ナデ	やや密 徴 砂粒含	良	灰白・灰 黄色	渥美・湖西型
41	008-02	磁器 椀	包含層	ロ:18.2	口縁部 1/8以下	内:ロクロナデ、外:ロクロナデ、	密 微砂粒	良	灰白色	青磁 釉 はオ リーブ 黄
42	008-03	陶器 蹇	包含層	ロ:31.8	口縁部 1/8以下	内:ロクロナデ、口縁部付近に自然釉 外:ロクロナデ	やや密 微 砂粒含	良	灰白色	常滑産 釉は 暗赤褐色
43	009-01	土師器 皿	包含層	口:8.2 器高:1.4	口縁部7/8 底部完存	内:ナデ、 外:オサエ	やや密 微 細砂粒含	並	橙色	
44	008-05	土師器 皿	包含層	口:8.0 器高:1.1	口縁部2/5	内:ナデ、 外:ナデ、オサエ、	やや密 徴 砂粒含	並	にぶい橙 色	
45	008-06	土師器 皿	包含層	口:8.0 器高:1.3	口縁部1/3	内:ナデ、 外:オサエ	やや密 微 細砂粒含	並	にぶい 褐 色	
46	009-02	土師器 皿	包含層	口:8.0 器高:1.3	口縁部1/8	内:ナデ、口縁部ヨコナデ 外:オサエ、 口縁部ヨコナデ	やや粗 砂 粒含	並	灰白色	

第2表 出土遺物観察表(2)



調査区遠景 西から

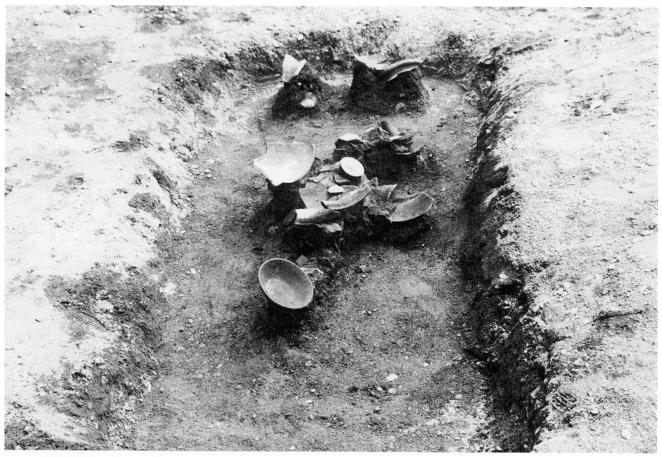


SD1 南から

図版 2



SD1遺物出土状況 東から



SK2遺物出土状況 西から

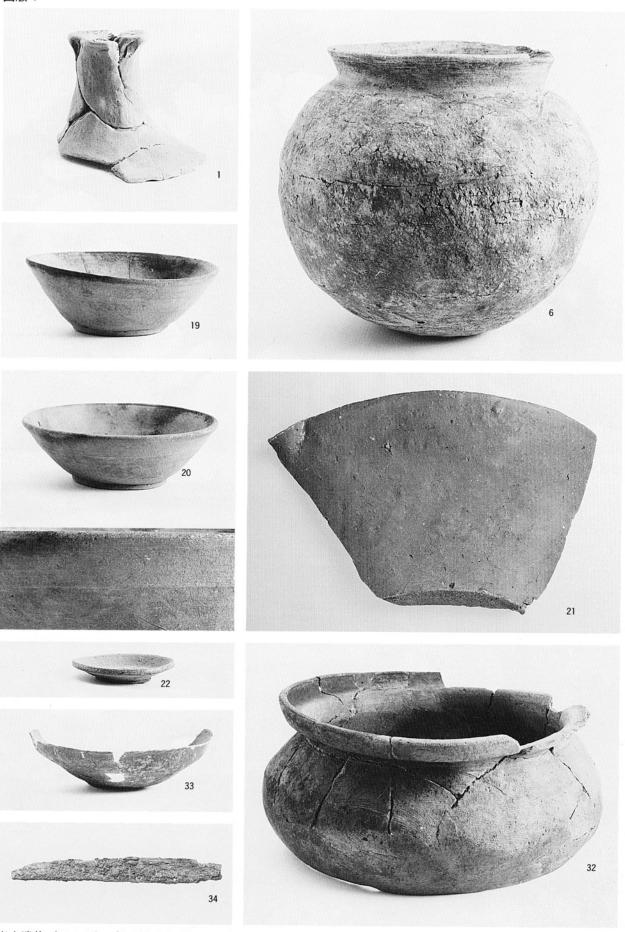


SZ9 北から



SB10 東から

図版 4



出土遺物 (1:3) (ただし34のみ1:4)

報告書抄録

ふ り か	ts	おうかでばりいせきはっくつちょうさほうこく								
書	名	Ħ	目可出張;	貴跡 発 掘 諰	查報告					
副書	名									
巻	次		7							
シリー	ズ名	Ξ	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ	番号	1 4 4								
編著者	名	日栄智子								
編集機	関	三重県埋蔵文化財センター								
所 在	地	〒 515-03 三重県多気郡明和町竹川503番地 TEL 05965-2-1732								
発 行 年	月日	尹	百暦1996	5年3月29	B					
ぁりがな 所収遺跡名	^{ふりが} 所 在		市町村	一ド遺跡番号	北 緯。,"	東 ;	経 調査期間	調査面積 m²	調査原因	
#2 ** でぼりしま* 相可出張遺跡	ユニザルス たまり はり たま 気 で出 まさ いまり はり まり まり はり きご 出 で出 で 出 で 出 で 出 で に いっこう いっこう いっこう いっこう いっこう いっこう いっこう いっこう		24441		34° 31′ 50″	136 32 20	2' 19950928	345	相可高等学校武道場建築工事	
所収遺跡名	種別	<u></u>	な時代	主	な遺権		主な遺	物	特 記 事 項	
相可出張遺跡	集落	1	良時代後期 兼倉時代	土坑 2 基 大溝 1 第			土師器高杯・甕 土師器皿・鍋 山茶椀 灰釉陶器 陶器片口鉢・甕 青磁片 瓦器 鉄製小刀			

平成8(1996)年3月に刊行されたものをもとに 平成19(2007)年7月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財報告 144

相可出張遺跡発掘調査報告

—— 多気郡多気町相可字出張 ——

1996 • 3

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター 印 刷 株式会社オリエンタル印刷